



## 聞き手のコミュニケーション上の機能としての「 確認のあいづち」

著者	久保田 真弓
雑誌名	日本語教育
巻	108
ページ	14-23
発行年	2001-01
権利	(c)2001 日本語教育学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2368">http://hdl.handle.net/10112/2368</a>

# 聞き手のコミュニケーション上の機能としての 「確認のあいづち」

久保田 真 弓

## 要 旨

あいづち研究では、頻度、表現形態、機能、タイミングなどについて研究がなされてきた。しかし、あいづちは、会話の内容、スピード、話者の親疎関係、言語や文化的背景などによってその表出が左右されるため、実態を把握するには、あいづちだけを対象に分析しても限度がある。特に日本語と英語のように異なった言語によるあいづちの比較や、初対面の会話と友人同士の会話の比較には、利用できる分析の枠組みが必要である。

そこで本稿では、「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンについて調査し、分析の枠組みになりうるかを検証する。聞き手の働きかけとして、聞き返し、先取り、繰り返し、言い換え、完結、質問を取り上げ、具体的に日本語と英語の会話資料をもとに「確認のあいづち」との関連を比較検討する。

そして、今後のあいづち研究に「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンを分析の枠組みとして利用することの有用性を考察する。

【キーワード】 あいづち、コミュニケーション、聞き手、応答ペア、非言語

## 1. はじめに

あいづちの研究は、会話中に現れる頻度、挿入のタイミング、表現形態、機能、話者の文化背景との関係などひろく研究されてきた（メイナード,1993; 堀口,1997; 杉戸,1989; 水谷,1988; 久保田, 1994 & 1998）。しかし、あいづちは、会話の内容、スピード、話者の親疎関係、言語や文化的背景などによってその表出が左右されるため、実態を把握するには、あいづちだけを対象に分析しても限度があると思われる。

そこで本稿では、日本語と英語のように異なった言語によるあいづちの比較や、初対面の会話と友人同士の会話の比較でも利用できる分析の枠組みとして、「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンであいづちを捉えることの有用性を検討する。特に応答ペアとあいづちとの関連に着目し、日本語と英語の会話資料を基に検証し、考察する。

## 2. 先行研究と本稿との関連

Schegloff and Sacks (1973) が提唱した隣接ペアの特徴は、挨拶のように二つのコミュニケーション上の行為からなるもので、それらは異なる話し手が起こす行動で、前半と後半の部分の行為には順序があり、かつ後半部分は前半部分より引き出されるというものである。一般に前半と後半部分の行為は、隣あっていることから「隣接」といわれるが、必ずしも隣り合っていない例がみられるので、本稿ではザトラウスキーが提唱している「応

答ペア」という用語を使用する（ザトラウスキー,1993）。

応答ペアを相互作用の観点から見ると、話者Aの挨拶や呼びかけなどのような行為によってAは話者Bの反応を制限していると考えられる。つまりBの行為は自由に選択されたものではなく、例えば挨拶に答えるか否か、どう答えるかといった中から選択されたものである。従ってBにとっては、コミュニケーション上の行為が制限される結果になっている。それはAにとっては、Bの行為が推測しやすいくということにもつながっている。またAは、自分の行為に対するなんらかの反応をBに期待しているという状況でもある。このような応答ペアには、挨拶—挨拶のほかにも、呼びかけ—答え、勧誘—承諾・断り、質問—答えなどがある。本稿では聞き手の行為としてみられる「聞き手の質問—話し手の答え」の応答ペアを取り上げる。

また、話し手が言い間違ったりした場合にさまざまなrepair（修正）作業が行われるが（伊藤,1997）、そのうち他者がイニシアティブをとり修正を要求し、自己が修正する場合は、聞き手の修正要求と話し手の修正がペアになる。

そこで本稿では、聞き手の働きかけとして、聞き返し、先取り、完結、訂正、言い換え、言い直し、質問といった広範囲の発話行為（伊藤,1997；堀口,1997）を取り上げ、それに対する話し手の応答、そしてそれに続くあいづちとの関係をみる。あいづちの分類は統一されたものがないので、ここではザトラウスキー（1993）の分類を参考に、応答ペアに続くあいづちを「確認のあいづち」と呼ぶことにする。ザトラウスキー（1993）は、電話による勧誘ストラテジーの分析で、あいづちを「注目表示」という発話機能として扱っており、11に分類した注目表示のひとつに「確認の注目表示」をあげている。具体的には、例1にみられるように先行する発話のくり返しによる確認（43S）や前の話から導かれる結論を確認しているもの（40Sや45S）がそれにあたる。

#### 例1（ザトラウスキー,1993, 会話例K）

- |                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 40S: おわりかけてんのか     | (確認) の注目表示・情報要求 |
| 41H: 終わりかけているっていうか | (同意) の注目表示・情報提供 |
| 42H: あと30分ぐらい。     | 情報提供            |
| 43S: 30分?          | (確認) の注目表示・情報要求 |
| 44H: はい。           | (同意) の注目表示・情報提供 |
| 45S: そうか。          | (確認) の注目表示      |
| 46S: なんか俺も見て—なあ。   | (感想) の注目表示・意志表示 |

そこで、本稿では、聞き手が聞き返し（43S）、それに対して話し手が応答し（44H）、それに続いて出るあいづち（45S）を「確認のあいづち」と呼び、「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」（網掛け部分）のパターンを日本語と英語の会話資料をもとに考察する。

### 3. 研究方法

被験者として関西地区に住む日本人12名（男6名、女6名）と北米アメリカ人12名（男10名、女2名）を事前調査して抽出した。抽出基準としては、アメリカ人は、日本に1年

以上滞在しており、ACTFLのガイドラインの日本語能力（特に話す力）が中級以上の者、日本人はアメリカに1年以上滞在したことがあり英語力（特に話す力）が中級以上の者とした。そしてアメリカ人と日本人を同じ国籍同士で、第2言語学習国での滞在年数、性別、年齢が同じようになるように筆者が二人一組の組み合わせを指定した。これらの要因による影響を極力少なくするためである。

初対面でも会話に積極的に参加できるように会話はタスクのあるものにした。まず日本語のテレビドラマ「平成カイシャ物語」と英語のテレビドラマ「Kate and Allie」、それぞれ30分のものを用意した。どちらも家族を中心とした話でドラマの展開に多少の喜劇性がある。二人一組の話者Aが別室に用意したテレビドラマの始めの部分8分を視聴し、それをもとの部屋に戻り相手の話者Bに10分で話して聞かせる。次に、話者Bが別室で同じドラマの最後8分を視聴し、それを元の部屋にもどり話者Aに10分で伝える。それぞれ10分間お互いに見たことを伝え合い30分のテレビドラマ全体の内容について推測してもらうことにした。その際、話し合った結果は、後でアンケート用紙で調べるのでお互いに協力して話し合うように指示した。日本人は日本語の、アメリカ人は英語のテレビドラマを視聴し、見た内容についてそれぞれ母国語で話した。

撮影は、大学の施設であるスタジオを利用し、ビデオカメラ2台、カセットテープレコーダー、マイクを被験者の横に設置し、照明はスタジオ全体にあてた。会話をカセットテープレコーダーに録音すると同時にビデオカメラ2台で話し手と聞き手の上半身をスプリット画面にしコード番号とともに録画した。本稿では言及しないが、視線、笑いも分析可能な研究手法をとっている。会話進行時には、被験者の2名を除いて誰も同室しなかった。本研究では各人が見たテレビの内容を話す10分の会話のうち、始めの5分間を分析対象とした。したがって日本人12人による日本語会話60分、アメリカ人12人による英語の会話60分の会話資料をもとにしている。

#### 4. 結果

聞き手からの働きかけとして、日本人の日本語による会話では、6種類の働きかけがあった。それらは聞き取りにくかった点や理解しにくかった点について説明を要求する「聞き返し」、話し手の話しの途中で聞き手がその先を予測して話し手が言う前に言う「先取り」、ただし相手が始めた文や語を終わらせてしまうものは「完結」、話し手の発話の一部または全部の「繰り返し」、他の語句による「言い換え」、発話順番を取って尋ねる「質問」である。これら6種類の働きかけが合計35あり、そのうち確認のあいづちが続いたのは31例であった。また、アメリカ人による英語の会話では、6種類以外のものもあり7種類の働きかけになった。それらが合計29あり、そのうち確認のあいづちが認められたのは25例であった（表1参照）。したがって「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンになったのは、日本語の場合89%、英語の場合86%で、日本人もアメリカ人も8割の割合で聞き返しなど聞き手への働きかけをした後、話し手からの応答を得るや否や、確かに応答が返ってきたことを認めたという意味のシグナルとして「確認のあいづち」を打っている。

表1 聞き手の行為と確認のあいづちの関係

聞き手の行為	日本語／頻度	付随した確認のあいづちの頻度	英語／頻度	付随した確認のあいづちの頻度
聞き返し	17	17	3	3
先取り	5	5	5	4
繰り返す	4	2	3	3
言い換え	0	0	3	2
完結	2	1	1	1
質問	7	6	12	12
その他	0	0	2	0
合計	35	31	29	25

認められた確認のあいづちの表現形態は、日本語の場合、「ええ」など短い発話に頭の縦振りが伴う同時あいづちが23例、頭の縦振りであるうなずきが6例、声を出しての笑いが2例の合計3種類だった。

英語の確認のあいづちとしては、同時あいづち13例の他、Ahと言って首を横に振るもの、Okと言葉だけのもの、Okといいながら手を打つもの、うなずきより小さい頭の縦振り、笑い、Yeahといいながら笑みを浮かべているもの、同時あいづちを打ちながら笑みを浮かべているものが各1例、笑い2例、うなずき3例、の合計10種類だった（表2参照）。

表2 確認のあいづちの形態

確認のあいづちの表現形態	日本語／頻度	英語／頻度
短い発話のあいづちと頭の縦振り	23	13
短い発話のあいづちと首の横振り	0	1
短い発話のあいづち	0	1
短い発話のあいづちとジェスチャー	0	1
小さい頭の縦振り	0	1
頭の縦振り（うなずき）	6	3
笑い	2	1
笑み	0	2
短い発話のあいづちと笑み	0	1
短い発話のあいづちと頭の縦振りと笑み	0	1
合計	31	25

このように「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンになる確率は日本語も英語も同じぐらいであったが、確認のあいづちの表現形態としては、アメリカ人の方が日本人よりさまざまな方法で確認のあいづちとして話し手にシグナルを送っていることがわかる。そこで次に具体的な例をいくつかあげ、応答ペアとの関係のみをみる。なお、会話の文字化記号は次の通りである。

H：頭の縦振り1回， h：小さい頭の縦振り， ?：上昇イントネーション  
 [ 2人が同時に発話し始める点 \_\_\_\_\_ (下線) 2人の会話が重なっている部分  
 ← 笑い → 笑みが聞き手の顔に浮かんでいる区間

## 5. 日本語の「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」パターン

### 5-1 「聞き返し—応答—確認のあいづち」の事例

例1は、聞き手の働きかけのひとつとして現れた聞き返しと話し手の応答と確認のあいづちである。話し手Aが視聴したドラマの内容について話す立場にあり、情報をもっている。Bが聞き手である（以下の例でも同じ）。

例1

1A： 一流企業に

2B： うん

3A： 入って、そうゆう順調な人生を送って欲しいと思ってる?

4B： **だんなさんに?**

5A： **だんなさんがそうやねんけど、**

6B： **HHHHH**  
**あ：うんうん**

7A： 息子にそうゆうふうに、同じように、そういうふうな成**功して** 欲しい。

8B：

**HHHHH**  
**せいこ うんうんうん**

聞き手は話し手の話の流れから誰に対して順調な人生を送って欲しいと思っているのか聞き返し (4B)、話し手がそれに回答し (5A)、聞き手はそれに対して「あ：うんうん」といいながら頭を縦に振ってあいづちを打っている (6B)。これが確認のあいづちである。さらに8Bで聞き手は先取りしようとするが、発話が話し手と重なったため「せいこ」まで発話し、そのあと「うん」を3回言っている。これは話し手の「欲しい」と重なっている。このように同時発話になるときは、相互作用のなかでも一番忙しいときだが、相手の発話への介入はなるべく控えた方が好ましい (クールタード, 1999) という配慮から、聞き手は、話し手の応答が始まり、それが聞き取れたときに確認のあいづちを打っている。これは「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」として機能しているあいづちであると同時に、「うん」を頭の振りをつけて3回も続けていることから、かなり強度にそこまでの話しはわかった、充分理解したという意味をかねている。

その他、聞き返してその応答が意外だったので、「おおっ」と驚きを示す形で確認のあいづちを打つとともに頭を一度縦に振り、話し手と一緒に笑うものがあった。

### 5-2 「先取り—応答—確認のあいづち」の事例

つぎに聞き手が話し手のジェスチャーをみて先取りした発話と確認のあいづちとの関係を例2にみる。

例2

1A: 言っていたら、なんか、僕はなんか受験なんか私が思ってたのはたぶん、

2B: h (小さい)

3A: お母さんが

4B: H

5A: 息子に

6B: H

7A: なんか受験しろみたいな、なんか、**プレッシャー**をすごい与えてたってかんじで

8B: **プレ** H—H—H—H

9B: H

うん

話し手は話の勢いによって両手を体の前で動かし、押さえつけるようなジェスチャーをする(7A)。それを見た聞き手は「プレッ」と先取りして同じように手を動かしながら「プレッシャー」と言おうとするが(8B)、話し手も「プレッシャー」と続けるので発話が重なる(7A)。すると聞き手は、話し手の「プレッシャーを」の「を」の所から、数回うなずく。これが確認のあいづちである。このようにとくに発話が重なるときは、音声より頭の縦振りで確認のあいづちを示すことが多い。

### 5-3 「質問—応答—確認のあいづち」の事例

杉戸(1989)によると発話には、「相づち的な発話」と「実質的な発話」がある。この分類によると質問は「実質的な発話」になる。聞き手による聞き返しなどが、さらに相手への積極的な働きかけとなると質問になると考えられる。そこで聞き手の働きかけの延長線上の発話として質問の事例をみる。

例3

B: H

1A: でも2回目子どもががちゃって開けて、うん、親父が入ってきて、

2B: H

うん

3A: で、(間)なんて、いうてたんか (笑い)

4B: 教科書とかなんか散らばってんやなあ?

5A: うん

6B: **階段に**

7A: **階段にばーって子どもがほおったみたい**

8B: H

うんうん

この事例では、話し手がテレビドラマでは次に何が起こったのか下を向いて思い出そうとしているため間ができる(3A)。そしてはっきり思い出さないで照れ笑いをする(3A)。

そこで聞き手が、話順を取り、助け舟として今まで聞いたことをもう一度確認しようと質問する(4B)。さらに6Bで場所の確認の質問をすると、話し手から回答を得たので(7A)、確認のあいづちを「うんうん」という音声と頭の縦振り一度で示している(8B)。このように聞き手の働きかけの延長線上の質問に対しても話し手の回答があると聞き手は、確認のあいづちを打つ。厳密には聞き手の聞き返しと発話順番を取った質問との区別がつきにくいときがあるが、確認のあいづちは、どちらの場合にも続いて出現する傾向にあるようだ。

## 6. 英語の「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」パターン

次にいくつか英語の事例をみていく。日本語の事例で取り上げなかった聞き手の働きとしての先取り、語の完結、言い換えとそれに続くさまざまな確認のあいづちを紹介する。

### 6-1 「先取り—応答—確認のあいづち」の事例

例1

1 A : Then she calls and

2 B : the answering machine picks up

3 A : Yeah, She calls her own place, answering machine picks up, and then she just (略)

4 B : HHH←-----笑み-----→

例1では、聞き手が話し手の話しを受けて先取りしたため(2B)、話し手はそれに応え、話しを続けている(3A)。そのとき聞き手は、話し手のYeahに合わせるように頭を3回振ったあと、顔に笑みをうかべている。この4Bに出てくるあいづちが確認のあいづちである。とくに頭を振って明確に確認のあいづちを打っている。そしてそのあとに話し手の発話のplaceまで笑みを浮かべているが、これも確認のあいづちである。そこまではすでにわかっているということを示している。

### 6-2 「語の完結—応答—確認のあいづち」の事例

例2

1 A : That's going back some. Kate...

2 B : ..Kate..em..Kate Smith?..Oh, Kate Jackson.

3 A : Kate Jackson

4 B : OK

5 A : Kate Jackson, So the ....I don't remember, I don't know who's Kate, and who's Ali.

例2では話し手がドラマに登場してくる俳優の名前を言おうとするのだがすぐ出てこず、聞き手が名前の続きを一緒に考え(2B)、やっとKate Jacksonと言い当てる。そこで話し手もその名前を繰り返して応答すると(3A)、聞き手はOKと叫びながら手を打つ(4B)。こ

れが確認のあいづちである。この会話はクイズ番組で制限時間内に回答するときみられるように非常に早いテンポで互いに身を乗り出して交わされているが、語の完結をした聞き手は、話し手の応答に対して確認のあいづちを打っている。

### 6-3 「言い換え—応答—確認のあいづちなし」の事例

例3

1 A : If they're there they'll save me, if not then a , you know,

2 A : nobody will answer and I'll get my money back.

3 B : hum

4 A : The answer machine picks up.

5 B : huhuhun ahaha

6 A : So the answer machine

7 B : She lost her money (hhh)

8 A : Yes, she lost her money and a

9 B : Why didn't she call collect?

10A : She's got, well, (笑い) anyway, she's got this going (笑い)

11B : H  
uh (笑い)

例3では、25セント硬貨しかない主人公が家に電話するシーンを説明している。なけなしのお金で電話したら家族が出ず、留守番電話が応答したと話し手が言うと(4A)、聞き手は大笑いする(5B)。そして7Bで、つまり最後ののぞみのお金をなくしたのね、と言い換えて発話するが、それは話し手が次の話しに進もうとする発話と重なってしまう(6A)。そこで聞き手は頭を小さく振って重なった会話を相手にゆずる(7B)。すると話し手は、聞き手の言葉を受けて再度留守番電話が出たということはお金を失ったことだと説明し、次に進もうとする(8A)。しかし、そのとき聞き手は間髪をいれず、なぜコレクトコールを使わなかったのかしらと首を横に振りながら疑問を呈する(9B)。この例の場合は、わずかに7Bで頭の動きがみられただけで、聞き手は9Bで話順をとって質問している。このように確認のあいづちは、次に質問や話題転換の発話などが続くとはっきり現れないことがある。これは、聞き手の働きかけのうち質問など内容を伴った表現形式の文をいう場合は、それ以前まで軽快に打っていたうなずきや短い発話のあいづちが止まる現象があり(久保田,1994)、それと関連があると考えられる。

このほか確認のあいづちが続かなかつた例は、話し手の応答がなかったり、話題がそれてしまったときである。また、話し手と聞き手が間を持たせるように話している場合、話し手からの応答があってもそれで終わっている。

## 7. 考察

「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンになる割合は、日本人による日

本語の会話でも北米アメリカ人による英語の会話でも8割であった。これは、日本語と英語という言語に関係なく、聞き手の働きかけとして聞き返し、先取り、繰り返す、言い換え、完結、質問などがあると、話し手はそれに応え、さらにその応えを確かに受け取ったというシグナルとして確認のあいづちが打たれる傾向にあるということである。会話を円滑に進めるために聞き手と話し手はこのようにして確認し合っている。応答ペアが連続した2つの行為ならば、確認のあいづちまでを含めてこそ完結するコミュニケーション上の行為であろう。なんらかの事情で応答ペアの回答がなかったりするように確認のあいづちも欠如することがあるが、大方話し手は無意識でも確認のあいづちが打たれることを期待しているのではないだろうか。

さらに英語の会話と日本語の会話の違いは、ダイアローグ的言語とモノローグ的言語(黒崎, 1998), または「対話」と「共話」(水谷, 1988)で言い表されており、会話中に認められるあいづちの頻度も日本語では英語の2倍近くある(メイナード, 1993)ことが指摘されている。そこで今後は、聞き手の働きかけとして「え?」という短い聞き返しから質問までを含め、「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンで分析対象の会話資料を検討し、その部分を取り除いた残りのあいづちを比較検討することにより違いがいつそう明確になると思われる。すなわち「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンは、共話という形で聞き手の働きかけがある日本語の会話資料の分析にも、対話という形で質問が多くだされる英語の会話資料にも共通して使える分析の枠組みであるといえるだろう。このように両言語の会話に共通した部分を取り除くことにより、違いをさらに厳密に検討することができる。

また確認のあいづちの表現形態としては、日本人の場合は短い発話のあいづちに頭の縦振りがともなう同時あいづちが頻繁に使われ、アメリカ人による英語の場合は、うなずきや笑いなど多種多様な形のもものが認められた。これは、あいづちを研究する際には非言語も含めて検討しないと見落とす部分が大いにあることを示唆している。とくに同時発話や速いテンポの会話でもうなずくことで容易に確認のあいづちとしてシグナルを送ることができるため、音声だけでなくビデオによる分析が不可欠となる。

本稿では聞き手の働きかけとしていくつかの例をあげたが、久保田(1994)では、応答に言いよどみがある場合は、話し手がきちんと言い終えてから確認のあいづちがでること、話し手の返答の正否にかかわらず返答があれば確認のあいづちを打つこと、話し手が自分の言い間違いに気がつき、何度か言い直したときには言い直すごとに確認のあいづちを打つことが指摘された。したがって、「聞き手の働きかけ—応答—確認のあいづち」のパターンでみられる確認のあいづちは、聞き手が頭の中の情報を整理するうえで不可欠な句読点のような役割をしているとも考えられる。これは日本語や英語という言語の特徴に関係なく同時発話やテンポが速い会話のときにも観察されることから、その機能は人間の記憶のメカニズムとも関連があるのかもしれない。

会話分析では、様々な会話の仕組みが相互につながっているため、一つの仕組みを発見することがほかの仕組みを発見する手がかりとなる(ザトラウスキー, 1993)。しかし本稿では話し手の頭の振りなどは検討されていないので、今後の課題としたい。

## 引用文献

- (1) 伊藤博子 (1997) 「対談番組における"Repair"」『日本語学』Vol 6-3 pp.62-74
- (2) 久保田真弓 (1994) 「コミュニケーションとしてのあいづち—アメリカ人と日本人にみられる表現の違い」『異文化間教育』8号 pp.59-76
- (3) \_\_\_\_\_ (1994) 「会話における聞き返しとあいづちの関係」龍谷大学国際センター研究年報 3号 pp.21-28
- (4) \_\_\_\_\_ (1998) 「日本語会話にみられる『共話』の特徴 日本人とアメリカ人によるあいづち使用の比較から」関西大学総合情報学部紀要『情報研究』7月 pp.53-73
- (5) クールタード (1999) 吉村昭市, 貫井孝典, 鎌田修訳『談話分析を学ぶ人のために』世界思想社
- (6) 黒崎良昭 (1998) 「会話を進展させる表現」『日本語学』3月号 pp.104-113
- (7) ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- (8) 杉戸清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身振りのあいづち—談話行動における非言語的表現」『日本語教育』, 67号 pp.48-59
- (9) 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- (10) メイナード・泉子 (1993) 『会話の分析』くろしお出版
- (11) 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』10巻10月号 pp.4-11
- (12) Schegloff, E.A. & Sacks, H. (1973) "Opening up closings" *Semiotica* 7 pp.289-327

本研究は、関西大学平成9年度学部共同研究費の助成金を受けて行われたものである。

(関西大学)